

『ホロコースト』の放映後 (上)

ギンター・アンダース 訳：柴 嵩 雅 子*

Nach 〈Holocaust〉

Günter Anders Übersetzt von Masako Shibasaki*

解 題

著者のギンター・アンダース (1902年~1992年) はブレスラウ生まれのユダヤ人で、ナチの迫害を逃れてフランス、アメリカに亡命した。戦後はウィーンに暮らし、旺盛な執筆活動を続けるとともに、反核運動、ベトナム反戦運動を繰り広げた。すでに邦訳された彼の著作としては、『ヒロシマわが罪と罰』(篠原正瑛訳、ちくま文庫)、『時代おくれの人間 上・下』(青木隆嘉訳、法政大学出版局)、『異端の思想』(青木隆嘉訳、法政大学出版局)、『寓話 塔からの眺め』(青木隆嘉訳、法政大学出版局)がある。

この「『ホロコースト』の放映後」は、同じく日記体で書かれたアウシュヴィッツとブレスラウの訪問記、『冥府巡り』(*Besuch im Hades*, 1967) に、1979年に付加する形で発表された。タイトルの中の『ホロコースト』は、NBCがハリウッドに作らせたテレビ用娯楽映画で、アメリカで1978年に放映されて大ヒットとなり、ドイツでも激論の末、1979年1月に放映された。エリ・ヴィーゼルを初め、その低俗さを酷評する知識人は少なくなかった。しかし放映後すでに30年近くたった今では、この作品のおかげで戦後ドイツにおけるユダヤ人大虐殺の受け止め方が決定的に変わった、と評価されている。「『ホロコースト』の放映後」でギンター・アンダースは、単にこのテレビ映画とそれが巻き起こしたセンセーションについて論じるだけでなく、過去の「克服」や戦争責任の問題、さらにはヒロシマにも触れて、彼ならではの鋭い考察を見せている。

なお文中の下線部は、原文がイタリック体で強調されている箇所であり、{ }内は訳者による注である。

キーワード

アウシュヴィッツ、ホロコースト、ヒロシマ

*しばさき まさこ：大阪国際大学人間科学部教授 (2006.11.28受理)

*初めに

私が子ども時代を過ごしたブレスラウは、ナチスによる荒廃の後ポーランド領となり、当然のことながら今ではポーランド人しか住んでいない。1966年にアウシュヴィッツからこの私の故郷への旅日記を書いたとき、ブレスラウ生まれのドイツ人読者は、ホロコーストから20年がたっているにもかかわらず、何百万人もの人間を抹殺し、ポーランドの町をことごとく破壊したドイツ人には、そのうちの二、三の町をドイツのものだと言う権利などないことを、容認できないでいた。(ちなみに、それらの町がかつてドイツ領だったのは、戦争で略奪したからに過ぎない)。ドイツ人は1945年以来、今に至るまで、死者を悼むことができないと、ミチャーリヒは述べている{A. & M. Mitscherlich, *Die Unfähigkeit zu trauern*, 邦訳『失われた悲哀』(林俊一郎・馬場謙一訳、河出書房新社)を参照}。彼の主張は間違いではないが、全く正しいわけでもない。何百万人もの死を悲しめないのは、ドイツ人に落ち度があるからではなく、そもそもそのようなことは誰にとっても不可能だからだ。もちろん、誰にもできないからと言って、それに甘んじていてはならない。せめて、なすべき追悼をなしえない自らの無能さについて悲しみ、実行しておらず実行不可能なもっと大きな悼みの代わりとすべきだろう。

私は何度もこんな反論を耳にした。親が為した悪行に対しては「何もできない」し、親の過ちと取り組み、その犠牲者の死を悲しめという要求は、まさしくナチの主張した「血縁」を私が支持していることを証明している、と言うのである。このように私を批判する人は例外なく、1933年以後、「血縁」の原理に平然と賛成し、従ってきた人たちの子どもである。しかし、彼らの言い分はナンセンスだ。私は親の犯した過ちを引き合いに出して、子どもを非難したりしてはいないからだ。

しかし、たとえ明確に親から距離を取ることであれ、何らかの形で自分の問題として受け止めることが望ましいように思える。先祖の偉業に対しては「何もできない」にしても、それを自分が成し遂げたかのように感じて誇らしくなるのは、よくあることだ。それどころか、そのような誇りを持って学校で教わるのだから、親の悪行も我がこととして考えるよう要求することは不当ではない。親の所業を恥じることができないなら、せめて驚愕すべきである。

そのような衝撃は、テレビ番組の『ホロコースト』の放送によって、すでに始まったように見える。かつて公刊した日記に続いて、『ホロコースト』放映後に日記に書きとめた考察をこうして発表するのは、驚愕している人々のためである。受けた衝撃を言葉で表現するために、もしかしたらこれらの論述が役に立つかもしれない。以下のページを、そうした人々に捧げる。

ウィーン、1979年4月

G. A.

* 1979年3月4日

私たちは『ホロコースト』を見終えた。36年前に事実を知って以来ずっと、昼はもちろん夜はなおさら毎日そのことを考えてきたが、そんな私たちでさえ改めて凍りついてしまった。このテレビ映画について、自分の好みを云々することは道義に反する。だが、経済的背景や利害関係や責任者が示されていないから、結局このドラマは役に立たないと非難する人も正しくない。そもそも何が起きたかを知らない人、あるいは「単に知識を持っているだけ」で実態を想像したことのない人——現代人の99%がこのどちらかだ——は、まづもって事実をありありと見せてもらう必要があったからだ。シリーズ第2弾をすぐに作ろうというのは、当を得ている。それを見れば、最初のシリーズを見た人が記憶を新たに作るからだ。ただし、原因を掘り下げる予定のシリーズ第2弾が、アメリカかドイツで制作可能かどうかは、はなはだ疑問だ。おそらくシナリオが「マルクス主義的」だと言って、制作者が付かないだろう。とはいえ最初のシリーズだけでも、「もっと正確な」書物や統計を千も並べた以上のことをなし遂げた。この教訓を忘れ去ってはならない。すなわち、事実は虚構によってのみ明白になり、無数の事件は個々の具体的事例によってのみ忘れがたいものになるのである。これこそ『ホロコースト』がやり遂げたことだ。それは、この肯定的な言葉を使つてよければ、「大成功」だった。

おかげでドイツ人は、ようやくヒトラー後の時代に入った。1945年の彼らは衝撃も受けず、波風も立てたがらなかった。過ぎたばかりの12年間とは、悼みによっても後悔によっても批判によっても繋がっていなかった。1978年は本来、1945年である。1945年に始まるはずだった衝撃が、遅ればせながら1978年に起きたからである。その間の35年間に生じたことを、歴史哲学的に言い表すことはむずかしい。ベンヤミンはクレーの絵、「新しき天使」を挙げて、背後を見やりつつ歴史の嵐によって前へと押し流されて行くと述べたが、この表現は当てはまらない。1945年以後、どこを向いても天使などいなかったことは別にしても、これまでドイツは背後、つまり12年しか続かなかった千年王国を振り返ってはならず、むしろこの期間は無かったことと見なしたからだ。かといって逆に未来へと突進してもいないし、嵐によって未来へ運ばれていたわけでもない。ドイツは完璧に敗北したものの、連合軍ですら政治的に望まぬ結果を引き起こすことを恐れて完全に敗者を叩きつぶしはしなかったので、千年の過去と未来にうんざりしていたドイツ人は、現在を欲した。つまり、住居、食事、テレビ、旅行、セックス、要するに消費に耽溺したのである。この歴史なき願望を、これまでにない規模で恐ろしいほど速やかに実現している間——正しくは、こうした願望を実現してもらっている間——、彼らは前を見てはいなかった。むしろ、自分たちのものではない歴史の嵐に運ばれるままになっていたのであり、せいぜい他の歴史の主体と共に「便乗して歴史的に」なっていたに過ぎない。消費は過去にも未来にも関与しない。消費者は将来を見据えて計画してはいないし、昔を思い出して懐かしんでもいない。実際この35年間、ドイツは多くの出来事があったにもかかわらず非歴史的だった。今日になってようやく当時と結びつくことによって、連続の可能性が、すなわち再び歴史的になる可能性が生まれたのだ。しかし、どうやら手遅れのようなのだ。大国はもう二、三しかなく、主権を持った歴史の主体など、過去のものになってしまったからである。

*3月5日

本当に二人の主人公のことは、私も忘れられない。批評家は、それも二流の批評家でさえ軽蔑して、それを「人格化」と呼んだ。しかし、そうした批判は不誠実である。『ホロコースト』は「人格化」しているから、何百万人もの大量殺戮を本質とする「最終的解決」の事実を些細なことのように見せかけると主張する人々は、実際のところ、このドラマの凄まじい効果を消し去ろうとしている。彼らは「人格化」している『ホロコースト』は、事件を矮小化していると称して、このドラマを矮小化しているのである。

これは「人格化」という言葉の、何とも不合理で偽善的な使い方だ。そもそもこの語に意味があるというなら、「人格化」できるのは非人格的なもの、つまり事物か観念に限られる。アニミズムでは事物を人格化し、護符には魔力が宿ると考える。アレゴリーでは観念を人格化し、「正義」を女性像として表す。しかし、ここで「人格化」は何を意味すると言うのだろうか。人間を人格化することはできない。せいぜいできるのは、奴隷化や物象化によって、あるいは単なるゴミへの転化——これこそアウシュヴィッツや抹殺だけを目的とした収容所で起きたことである——によって人格性を奪われた人々、つまり「非人格化」された人々を「再人格化」することだ。それを示したのが、『ホロコースト』である。人間が非人格化され、人格であったものが単なる材料へと加工されてしまう様子を描いたことが、あのドラマの功績なのである。「第一質料」という概念に対応して、「最終質料」という概念を作るべきだろう。『ホロコースト』が示したのは、収容所で「最終質料」として扱われたものは、かつては「私」や「私たち」と語り、希望や愛を胸に抱く「人格」であったということなのである。

そもそも人格を示すことは、欠点なのだろうか。「世界の問題を人格化した」という非難など、アイスキュロスから今日の劇作家に至るまで、誰も理解できないだろう。悲劇作家は皆、「普遍的な人間性」を扱うとき、個々の人間に具体化させて、つまり人格化させてきたし、そうせざるを得ないからだ。人格化をけなすとは、なんと不真面目なことか。まるで恐ろしいことは一人一人の人間には起こらず、現実には個人の例の一般化ではなく一般的な事柄の中にあり、数えられたものではなく数字の中にあるかのようなのではないか。私たちは過去を「克服」しなければならないのに、大量殺戮者の犯した非人格化を真似しようと言うのだろうか。

非人格化はまさに殺害者が行なったことで、彼らは人間貨物の運行予定を作成していた。私たちの父母や兄弟姉妹を「下等人間」と呼び、こう呼び始めると容易に思われただろうが、下等人間あるいは家畜として扱った。さらに私たちの家族がビルケナウ収容所に着くと、本当に「下等人間」になるよう強制した。つまり、前の列車で到着してガスで殺された人々の死体の灰を焼却炉から掻き出させた上で、裸でガス室へと追いやったのである。『ホロコースト』が「人格化」したというより、殺害者が人々から人格を奪ったのだ。その事実を示すためには、まず人々を人格を持つ人間として描く必要がある。私たちがしなければならなかったことを、テレビ映画がやってくれた。つまり、数字を人間に戻し、ガス殺された600万人は一人一人異なる600万の人間だったことを示してくれたのである。

『ホロコースト』は誇張がないばかりか、実際より「抑えて」いた。人間の「ゴミ化」

『ホロコースト』の放映後（上）

——「物象化」は前世紀の婉曲語法の名残に過ぎない——をきわめて控えめに表現していたからである。人間性を奪われた人間だけでなく、人間ならざるものにさせられた人の人間性をも見せ、非人間化の過程を理解できるように提示した点で、あのドラマは立派である。また哲学的でもある。なぜなら、これまでの小説や映画にはなかった人物像を創り出し、しかもそれを主人公の一人としているからである。その人物像とは今日の詐欺師の中でもっとも重要なタイプで、あからさまに嘘八百を並べるのではなく、犯罪の呼び名を変え、同時代の共犯者、お目出度い人間、上司、それどころか被害者にさえ、その犯罪を無害で取るに足りないように見せ、ついには自分もそう思い込んでしまうのである。（この現代的なタイプのペテン師を、私は「名称偽装工作師」と名づけた。『終末と時代の終焉』、126ページ以下を参照）。『ホロコースト』は重要な点を示したが、もちろんジェノサイドで結局、誰が利益を得たのかを説明してはいない。その説明が一層困難になるのは、抹殺作業が例えば膨大な数の車両を利用した結果、戦争の遂行を大きく妨害したからである。けれども黒幕を暴くような映画は、アメリカで撮影することもドイツで上映することも不可能だろう。『ホロコースト』を、純粹に審美的と称する観点から批判し嘲笑することは、馬鹿げている。いや悪しき誤解を生んでしまう。人にショックを与える点を「センチメンタル」だと笑いものにし、この「作品」は「利益」だけを目的に生産された「商品」だと急に非難を始めた連中が、これまで何をしてきたか見てみるといい。そもそも、そのような非難が当てはまらない映画がどこにあるだろう。

*3月6日

疑問の余地なく古典的な意味での乱暴者、サディスト、人を侮辱する人、殴打する輩、拷問者、殺し屋は数え切れないほどいて、今も私たちの間で生きている。死体製造の責任者が皆、「デスクワークしかない殺人鬼」だったわけではない。自分の手を汚すまいとしていた連中は、実行犯を必要としていた。さらに国民社会主義のおかげで、非道の限りを尽くしても罰せられずにすむ未曾有の機会を得た者もごまんといる。彼らは犯罪が許可されるばかりか、ヒムラーの例から分かるように、犯罪を神聖な義務と見なせるチャンスが与えられると、日々の「手頃な」拷問と殺人を楽しむ誘惑に抵抗できなかったのである。犠牲者をもっぱら集団として見るのが正しくないのと同様、殺人者をもっぱら巨大な殺人機構における「機械の部品」と見なすことも間違っている。殺人機構が与えた機会を利用して、自らのサディスティックな欲望を満たした人殺しも、一人一人の人間なのである。彼らも非人格化してはならない。カントの言う意味で道徳的「人格」でなかったにせよ、彼らも個人であり、ヘーゲルの言うなら、個人として責任を負わせられる「権利」を有しているのである。

*3月6日

新聞でも雑誌でもラジオでも、「抑圧」という言葉が嫌と言うほど使われている。当時から現在に至るまでの36年間は、「抑圧の年月」だったと言うのである。「抑圧されてきたこと」が明るみに出てきたというのは、本当だろうか。これほど長い潜伏期の後、突然、

何十万人、それどころか何千万人も治癒が起こるものだろうか。私は疑問に思う。

「抑圧」の話は、ある体験を以前にしたものの、それは耐えがたく心の整理がつかなかったので、想起できなくなったということを前提にしている。つまりトラウマを想定しているわけだが、それは正しいのだろうか。

ここで問題なのは、単に想起できないこと、「追悼をなしえないこと」だけではない。その無能さは、もっと昔に遡る。彼らがかつて自ら手を下したり見たりした言語に絶する犯罪を、戦慄すべき事件として経験することができず、おぞましいことをおぞましいと感じも捉えもしていなかったのである。記憶がないだけではなく、そもそもトラウマがなかった。感覚が鈍くなっていたか、あるいは無感覚にさせられていた。ともかく、傷のない所には、かさぶたを作る必要もなかったのである。

実際に拷問し殺害した者に当てはまることは、程度の差はあれ、非ユダヤ化を知っていた人や目にした人、すなわちほぼすべての人にも当てはまる。1940年代初頭のドイツとオーストリアでは、ユダヤ人が100万人以上住んでいたこれらの国が「ユダヤ人ゼロ」——ぞっとするような婉曲語法だが、誰も意に介さなかった——になってゆく様を、見もせず気づきもせず知りもせずにはいられなかった。それを彼らは抑圧したのだろうか。そんな御立派なことではないだろう。「抑圧」という表現は、彼らがそもそも内心衝撃を受け狼狽していたと前提しているが、そんなことはなかったからである。むしろ、「ないものは目立たない」で、彼らはすっかり「全体主義化」されていたため、見るべきでないものは本当に見なかった、いや、感じるべきでないことは本当に感じなかったのである。彼らは精神的にも感情的にも自主性をなくしていた。

同様のことが敗戦直後にも当てはまる。35年前のあの頃、収容所や焼却炉や死体の山の写真、本、映像に出合わずにいることは不可能だった。連合軍が解放後に撮った強制収容所の映像は、集団的な悪夢になってしかるべきだったのに、そうはならなかった。またもや人はこれらの映像に気づかず、それゆえ抑圧する必要もなかったのである。気づかなかった理由は、自分もようやく瓦礫から出てきたばかりだということでもなければ、かろうじて助かった者として、助からなかった人のことなど見たくも聞きたくもないということでもない。たった今まで熱狂的に賛同していた事柄を思い起こしたくないということでもなく、12年間にわたり組織的に羞恥心を叩きつぶされ、12年間にわたり破廉恥を美德として叩きこまれたからでもない。ここで改めて「人格化」の問題が浮かび上がるのだが、収容所に関する映像に人々が留意しなかった理由は、何よりもまず、映し出された死体の数が余りに多すぎて、死への恐怖、殺人への恐怖も減ってしまったからであり、映っているのは犯罪の結果、つまり死体の山だけで——それしか示しようがないが——、犯行そのものでもなければ、まさに「苦しんでいる」犠牲者でもなく、彼らが「処理」されているところではないからである。死者はいつも匿名のまま、生前から知っていたり親しくしていたりした人たちではない。その上、映像だけでなく説明文も添えられた場合、いつも漠然とした「600万」という数字を見聞きするだけで、被害者の呻き声と拷問吏の嘲笑を600万回とまで言わずとも、6千回いや6回も聞きはしない。人々は600万という数字を「ひとかたまりの巨大な死体」のようなものと受け止め、一つ一つの死体が600万あるとは思

わない。莫大な数字に還元されてしまったため、33年たってもメッセージが人々の耳にも目にも心にも届かなかったのである。事実を「受け入れ」させようとするなら、そのように結果だけに縮小し、「途方もないことで済ませてしまう」のを止めなければならない。これこそようやく起きたことであり、『ホロコースト』の功績なのである。今日、何千万もの人が真実を知ったのは、特定の個人に限定したと嘲笑された手法のおかげなのである。ただ事実や統計的数値を並べるだけでは、想像力をかき立てて実感させることは不可能だが、あのテレビ映画はそれをやってのけた。何百万という数字を出しても、たった一人の人間の真実にさえ迫ることはできないが、たった一人の架空の人物でも、私たちがその暮らしを知って好きになった人が苦しめられるのを描き出せば、何百万人の運命について多くのことを物語り得るのである。

*3月6日から7日にかけての夜

ドイツ民族は「過去を克服していない」と言われる。そもそも「過去の克服」などというものが、あるのだろうか。もしあるとしても、それは望ましいものなのだろうか。

34年間、使われてきた「過去の克服」という言い回しは、「過去を片付けること」を意味してはいない。というのも、大半の人が過去に悩まされないでいられたということこそ、戦慄すべき事実だからである。「過去の克服」という表現は、経験がまず傷を作って「トラウマ」となり、次に第二段階として経験が「抑圧」され、この抑圧を解き放つのが「克服」であり、この第三段階は少なくとも望ましいものだとはなから決め付けている。しかしこの前提は実証されてはおらず、単なる仮説に過ぎない。この仮説が間違っているのは、大半の人が抑圧からの解放を必要としていないからであり、それが不必要な理由は、彼らが何も抑圧しなかったからである。そして抑圧しなかった理由は、彼らの体験——およそ体験などというものがあったとしてのことだが——はトラウマ的ではなかったし、トラウマにならなかったからである。実際、「過去の克服」という表現は駄法螺に過ぎない。運命的な12年の間、ドイツ人の心に何が起きたか、いや正確に言えば何が起きなかったのかの洞察が、この言葉には全く含まれていないのである。

「克服せよ」という要請もドイツで生まれたものではなく、アメリカの通俗心理学から輸入されたものだ。34年前、「トラウマ→抑圧→抑圧されたものの意識化（克服）→健康」という図式を、無知に任せて通俗心理学では扱えない領域に機械的に適用してしまったのである。精神分析家が、患者は体験を「克服した」と言うとき、それは患者はもう体験によって苦しむことなく、これから生きていけるし、生きていってよいということを意味している。他方、私たちが「克服」という語を借用するなら、それとは正反対の意味になる。つまり、かつてドイツ人は過去をたちまち片付けてしまったので、私たちにとって「克服」の意味は、「彼らが過去を追いやらずに、ようやくトラウマを受け、甘んじてトラウマを負う」ことになる。なすべきことは「癒し」ではなく「傷つくこと」なのである。昔なら「後悔」と言ったかもしれない。というのも人は後悔するとき、「犯してしまったこと」を振り払えず、「あんなことをしなければよかった」と望むからである。実際のところ、「克服せよ」と言われたとき、何が要求されているのか、かつてのドイツ人はよく分かっている。

た。それは彼らの反応が証明している。彼らは「克服せよ」など恥知らずなお節介だと、にべもなく拒絶してしまったのである。彼らがいましましくも断っていること、あるいは『ホロコースト』を見るまで断ってきたこととは、35年間にわたって何の記憶にも邪魔されず、ぬくぬくと過ごしてきた平安から引きずり出されることなのである。独善も甚だしいことだが、彼らは自分には罪がないと感じている。しかもそれは、彼らが自分の所業に苦しんでいないという馬鹿げた理由からなのだ。良心が機能していないことを、彼らは身の潔白の証明として利用しているのである。

『ホロコースト』によって現にそれはもう始まっているかもしれないが、起こるべきことは精神分析による治療過程とは逆であり、健やかさを損なうとまでは言わずとも、不快感を与えることなのである。『ホロコースト』を見て陥った状態を表すのに、数多くの人が「ショック」を口にした。そして他ならぬショックを受けたこれらの人々が、『ホロコースト』の再放送に賛成している。実は「ショック」は、道徳的「健全さ」を可能にする条件なのである。

ただし奇妙でかつ嘆かわしいことに、「ショックを受けた」と答えた人の大半が、過去の犯罪に手を染めたはずのない若者であった。ついでながら、彼らがショックを受けた理由は、自分の両親があのようなことを実行あるいは関知していた可能性があるからだけではない。同様の状況に陥れば、自分もあのようなことを実行するか「関知する」かもしれないからである。『ホロコースト』を見た感想を訊いたとき、ある16歳の少年の答えは喜ばしい——ここで、このような言葉を使ってもよいとしてだが——ものだった。「怖いです」と彼は言った。「ユダヤ人のヴァイス家に降りかかったようなことが、君にも起こるかもしれないからかい」と私が尋ねると、少年は一瞬黙り込んだ後、小声で答えた。「それもあるかもしれませんが、ドルフがしたことを僕もやってしまうんじゃないかと思ったんです」『ホロコースト』に登場するドイツ人青年のエリク・ドルフは、SSに入隊し、ユダヤ人絶滅の効率的方法を開発した。

*3月8日

あの出来事はたとえ「克服」しようとしたとしても、現実には克服不可能である。それには三つの理由がある。第一に、ほとんどの犯罪が上位者の命令（ないし「許可」）により、「皆と一緒にした」からである。戦場ではどんな兵士でも当然のように人を殺すことが証明している通り、「皆と一緒にしたこと」は、一人一人の良心に実は何の影響も与えない。いわば良心の中を探しても見つからないのである。広島のパイロット、クロード・イーザリー（広島に原爆を落とした際の、気象偵察機のパイロット）は残念ながら例外である。彼にしても、皆と一緒にしたことを悔いようとする努力は、さして実りなく終わっている。むしろ彼は後悔の失敗に苦しんだ。もっとも、この点でも彼は賞賛すべき例外である。この失敗ゆえに、彼は怒って暴れまわり、悔いる材料を得んがために軽犯罪を犯したのである。第二に、あれほど大規模の犯罪に対しては、心理的に対応するいかなる試みもまず失敗せざるを得ない。しかも不可能なのは後悔だけではない。殺された数多の人々を覚えておくこともできないし、それどころか、そもそも「本当に」捉えること、すなわ

ち真に認識することも不可能なのである。あれほど巨大な犯罪を前にすると、知覚能力が働かなくなってしまう。これは余りに大きすぎる災厄の被害者にも当てはまる。ヒロシマで原爆の閃光が走った瞬間について何か話してくださいと私がお願いしたとき、生き残った方々が口ごもるようになかなか答へなかったことが、それを証明している。それどころか、「全く何も感じませんでした」と答えた人さえいた。ともあれ、犯罪の規模が大きくなるに連れ、それをありありと思ひ浮かべる可能性は減り、それとともに当然、犯罪を「克服する」見込みも下がる。後悔が生じなかったのは、まさに犯罪が極めて大きかったからなのである。第三に、人間は言語化できることしか記憶できないし、思い描くことも、いやそれどころか的確に知覚することすらできない。すなわち知覚と記憶は言語によって制約されているのである。言葉で表現できない印象は、印象として残らない。アウシュヴィッツ以後、詩作は不可能だというアドルノの言葉は、彼自身が考えていた以上に正しい。私たちの言葉で充分アウシュヴィッツを言語化できるとは、誰も言わないだろう。「パウエル・ツェランは出来た」という主張は、流行が好きな連中がほざくナンセンスに過ぎない。彼らは1960年代、流行に後れまいと、身に危険の及ばない程度の反ファシズムを標榜していたのである。

*3月9日

1963年にメキシコでイーザリーに会ったとき、彼は絶望の余り叫んでいた。この例が示しているように、今日の絶望は後悔としては表出されないのである。古きよき時代であれば、人が自らの悪行を認識し、自分が犯したこととして自ら過ちを認め、「私が悪かった、私が悪かった、私が一番悪かった」と公言することができた。今日の絶望——そもそも絶望が表出されるとしてのことだが——の本質は、関与した犯罪が巨大なために、自分が犯したこととして考えようとしても、それができない点にある。かつてイーザリーは、「後悔さえできたなら、いいのだけれど!」と呻吟していた。しかし彼は後悔しようとするのを、諦めなかった。ヘボ作家のヒューイ（ウィリアム・ブラッドフォード・ヒューイ。『ヒロシマ・パイロット——クロード・イーザリー少佐の場合』の著者）は、「後悔しているイーザリーの伝説」を明らかなベテンとして暴露するために彼のもとを訪れ、「クロードが後悔しているなど、全く問題にならない」と嘲笑的に断言しているが、ヒューイがそんなことをしたのは、反核運動が気に入らない公的機関のために、後悔すべきことなどないことを証明できたと考えたからだ。つまりトルーマン大統領の言葉を借りれば、「ヒロシマは申し分なかった」というわけである。「私は後悔していない。それゆえ犯罪は起きなかった」。こうした奇妙な思考モデルは、アウシュヴィッツのSS隊員ももちろん使っている。ヒューイ自身は感付いていなかっただろうが、ある意味で彼は正しかった。イーザリーは後悔を必死に望んでいたものの、その規模が余りに大きすぎて、実際には果たせなかったからだ。とはいえ、彼が後悔できなかったことを突き止めて、「しめた」と思うのは卑劣だ。そもそも、あれほどの大事を後悔できるような人間は一人としていないし、ましてや後悔しようと絶えず努めることなど、誰にもできないからである。しかしイーザリーは何度も何度も後悔しようと試みた。そこがアウシュヴィッツに関与した連中と大き

く異なるところだ。アイヒマンは比較にならないほど重い罪を犯していたし、チクロンBを供給した化学部門のお偉方は、その使用目的を知らなかったはずがない。また建築家やエンジニアが喜んでともに働いてくれたかおかげで——「働けば自由になれる」というわけか——死の工場の設置は可能になった。だが、彼らは後悔などとは全く無縁だったのである。

***3月11日**

今一度、「克服」の要請について考えたい。この言葉は、私の知っている倫理書には出てこない。人が犯した罪に対してとる態度を問題にするときは、むしろ「悔恨」や「弁償」と言った表現を使っていた。もちろん、殺された何百万もの人の弁償はありえない。しかしそれにしても、なぜせめて「後悔」について話さないのだろうか。多くの被告の口から、ただの一度もこの言葉が出て来なかったとは、言語道断ではないだろうか。ノーヴァクの二つの裁判を傍聴した際、私は何週間ものあいだ、この言葉を待っていた。ノーヴァクはアイヒマンの直属の部下で、絶滅収容所への鉄道移送の計画と調整を担当していた。彼は並外れた知性を持っていた（いや、今も持っている。何しろ無罪を言い渡されて、そこらを自由にうろついているのだから）。彼は自分の行動、自分の犯罪を見渡せる立場にいた。けれども、「後悔」という言葉を待っても無駄だった。彼は無実の人間のように振舞い、残虐行為について数時間にわたり議論されているときも、証人を前にしても、「悔やまれます」とささやく素振りさえ全く見せなかった。このことは、どのように説明したらよいのだろうか。

彼らが後悔しないのは、振り返ってみて——犯行当時、すでにそうだったかもしれないが——、犯罪を自分自身の所業と感じていないし、自分が犯人だとも認識していないからだ。つまり、彼らと事件との間には最初から距離があるからだ。この点は、「普通の犯罪」と異なっている。普通なら多くの犯人は、自分がやったという事実を必死になって消そうとしても消せず、こうした距離を望みながら、やったのは自分だという意識は一瞬たりとも消えない。このような自分がやったという思いが、後悔の前提だろう。今日の大量殺人者は、まずそれを修得しなければならないようだ。なぜ彼らには、自分がやったという意識が欠けているのだろうか。

たいていの場合、彼らが悪事を犯したのは、自分で決断したからではなく、命令されたからである。つまり、おぞましいことだが、弁護人が全くの善意から論じたように、彼らは悪事を義務として為したのであり、しかも彼ら自身が行なったのではなく、「立場上」行なった。弁護人によると、彼ら自身はそのような立場と同一ではなかったし、いずれにせよ今日では確かにもう同一ではない。（『塔からの眺め』の寓話、「性質」を見よ）。

彼らは悪行を直接的にはなく間接的に犯している。例えばチクロンBの製造者の場合、この毒物を使用したのではなく、「単に製造しただけ」なのである。「他の人がそれで何をしようと、それは私には関係ございません」というわけだ。

ここで問題となっているのは個々の犯罪ではなく、犯罪の連続、犯罪から織りなされている悪しき生である。たった一度の犯罪なら、それを後悔し、言わば自分の生涯から摘出

することは、容易ではないものの不可能ではない。他方、生活の大半が悪に染まっている場合、それを切除することはまず不可能な手術となる。

彼らは悪事を犯すとき、まず一人ではなく、たいてい他の人々と一緒にあり、そうした人々の「支え」を感じている。つまりそこには、「正当化する効果」が生じているのである。他の人とともにしたこと、少なくとも他の人も知った上でしたことが、「罪」になりうるとしても、彼らから見れば、自分たちがしたことはせいぜい「共犯」でしかなく、そもそも罪を認めるにしても、自分自身の罪とは認めていないのである。

彼らの悪行は明らかに命令されていなくとも、明らかに禁止はされてもいない以上、犯罪にはなりえない。禁止されざることは許容され、それどころか認可されるのである。

加害者は自らの悪行について、何十年も語っていない。語らないことは、明日になれば思い出せなくなり、明後日になれば無かったも同然になってしまう。

ここで問題にしている犯罪は、「日常的大罪」とは根本的に異なる。なぜなら、それは「人間の限度を超えて」いるからだ。つまり余りに大き過ぎて、把握することも記憶することも後悔することもできないのである。このことは、絶滅収容所の連中だけでなく、イーザリーにも当てはまる。

ここで問題にしている犯罪は、個人的な犯罪のように直接、記憶することができないので、振り返って取り上げ、後悔の対象とすることもできない。人の死を悼むことができなくなっていると、ミチャーリートはいわれなく語ったわけではない。彼は無論、間違っていないが、そのような作業をせよという要求が全く新しいという点を、十分に強調していないように思われる。アウグスティヌスのように、罪深いとされる青年時代を悔いるよう良心が呼びかけるとき、わざわざ「作業」をするわけではないし、かつて罪を犯した自分を思い出すのに、苦悩はともかく、苦勞はいらない。「私がやりました」、つまり、これこれのことを仕出かしたのは私だというのは、明白かつ消し去れない経験である。かつてのことを探し出す必要などない。それはむしろ自ずと「浮かび上がってくる」ものだ。

強制収容所のもつれあった死体の写真を被告に見せても、そのような同一化体験、つまり「こんなことをしたのは私たちだ」あるいは「やったのは私だ」という意識は出て来そうにない。私たちが二度とこのような危害を互いに加え合うことのないよう、あるいは知っていながら黙認しないよう、真剣に努力したければ、たとえ何度失敗しようとも、自分がしているという意識を絶えず持とうとしなければならない。さもなければ、特にやりたいと思わずとも、自分の目で見ていながら、自分が何をしているかに気づかないまま、天に向かって叫ぶ死体の山や瓦礫の山がまたもや現われることになるだろう。ただし天が——自己欺瞞は止めよう——与える道徳的指示は、殺すな、奪うな、騙すなと、せいぜい身近な隣人に関するものばかりで、組織化された世界で私たちがしてはならないことについては何も教えてくれない。従来の宗教的・哲学的な倫理は例外なく、すっかり古びてしまった。それらは被爆者とともに広島で吹き飛ばされ、ユダヤ人とともにアウシュヴィッツでガス殺されてしまったのである。今は新しい道徳の元年なのだ。というのも、これまで全く予想されなかったようなことが、私たちの誰にでも起こりうるようになったからである。たとえば、上からの命令——人間ではなく組織の命令であることも多い——で、自

分が与り知らぬ都市を丸ごと消滅させろ、と言われるかもしれない。あるいは、アウシュヴィッツは当然さらに現代化され、養鶏場の基準が適用されるだろうから、ベルトコンベアで死体を焼却炉に運べ、と命じられるかもしれないのである。

いわゆる「唯物論」によってではなく、技術によって神の消えた今日の世界で、何者か何事かによって是認された倫理を築くことに、なお意味があるのだろうか。いつ何時、末期から終末へと移りかねない今日の世界で、倫理のようなものを打ち立てるために、意味なき猶予が私たちに与えられているのだろうか。私には分からない。ただ思い浮かぶのは、船がすでに傾いているのに、心得を書いたポスターを船室に貼るよう水夫たちに指示したモールシアの船長の話である。「モールシア」は、アンダースの著作にしばしば登場する虚構の国】。